Bulletin of Jumonji University, vol.50, 2020

実践・調査報告

# 幼児教育学科でのピアノの演奏に関わる授業等での教授法を振り返る
## ―ＭＬ教室の活用と読譜力の育成―

Study of Teaching method for piano playing
– Utilization of MLsystem and Method of Reading musical score –

二宮　紀子
Noriko NINOMIYA

**要旨**

今年度４月にＭＬ教室が設置されたことを機に、幼児教育学科のピアノ演奏に関わる科目、特に「音楽基礎Ⅱ」（１年次後期開講）の準備講座を自主ゼミという形で開講した。また現行では子どもの歌の伴奏法の内容を扱っている「保育内容の指導法（音楽表現）」（３年次前・後期開講）の授業をＭＬ教室で行った。本稿はこの２つの実践の報告である。ＭＬ教室では学生一人に１台の電子ピアノが割り当てられるため、楽譜の読み方や子どもの歌の伴奏を考える際に必要となってくる音楽理論を、実際に弾いて音として確かめながら学ぶことができる。その利点を生かしながら、受講者全員でまずピアノの課題の楽譜を、あるいは子どもの歌を全員でドレミで歌い、拍に合わせてリズムを叩くという準備を行ってから弾くという学習を行った結果、読譜力の育成、音楽理論理解、ピアノの演奏技術習得に効果が認められたことを、講座終了後の学生の姿や授業終了後に行った学生アンケートの分析から見ることができた。日本の音楽教育で読譜や理論の学びを難しいものにしている原因の一つがドレミ唱法の混乱である。ハニホヘトイロハという音名を定めておきながら、固定ド唱法と称してドレミを音名としても使い、階名であるドレミとの混乱を招いた。ピアノを弾くというだけであれば、五線による楽譜もピアノの鍵盤も固定ドの原則で作られているので、固定ドだけを学べばよいと考える教員もいる。しかし、音楽のしくみ、音階や和音の機能などは移動ド（階名）の考え方に基づいていること、何より保育者になる学生達には子どもの声の高さに合わせて自在に高さを変えて歌える力を身につけてもらいたいことから、階名としてのドレミ唱法を理解してほしいと考えている。学生が、混乱を招きかねない２種類のドレミ唱法を経験しながら奏法と理論をどのように学んだか、ＭＬ教室ならではの学習の流れと工夫点を振り返り今後の授業実践に反映させたい。

十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科
Department of Early Childfood Care and Education, Faculty of Human Life, Jumonji University
キーワード：ＭＬ教室、読譜、固定ド唱法、移動ド唱法、拍とリズム

## １．はじめに

本稿は本学の幼児教育学科で開講されている音楽に関わる科目の中でも、とりわけピアノ演奏に関わる授業、「音楽基礎Ⅱ（ピアノ基礎技術）」（１年次後期開講）の履修に向けた準備講座（自主ゼミとして前期に開講）と、「保育内容の指導法（音楽表現）」（現行のカリキュラムでは子どもの歌の伴奏法を内容としている。３年次前・後期開講）におけるＭＬ教室での実践報告である。ＭＬ教室とは電子ピアノが複数台並んで置かれている音楽室のことで、学生は音楽理論を実践を通して学ぶことができる。初めてＭＬ教室を使用して行われた準備講座と授業での２つの実践内容を振り返り、その教授法を精査することで新しい授業形態における内容と方法の充実を図ることを目的とする。

### １－１　本学幼児教育学科のピアノ演奏に関わる授業等の現状

本学では令和２年度より新体制に切り替わり、各科のカリキュラムも大幅な変更が行われる。幼児教育学科も例外ではなく、音楽に関わる科目の配置、内容は科目名の変更とともに大幅に見直され、準備が進められている。ピアノ演奏に関わる新体制の授業に関しては、本年度４月よりＭＬ教室が設置されたことに伴い、新カリキュラムへの移行を待たずに令和元年度より実施されることになっている。新カリキュラムでは「音楽表現基礎技能」と改名される１年次後期開講の「音楽基礎Ⅱ（ピアノ基礎技術）」の授業では、従来行われてきたピアノの課題の個人レッスンと抱き合わせる形で、楽典や簡単な和声理論、子どもの歌の伴奏法を含む理論の勉強がＭＬ教室で行われる。

「音楽基礎Ⅱ（ピアノ基礎技術）」が１年次後期に開講される理由は、ピアノを習ったことがない学生に前期を準備期間として提供するためであった。授業では課題としてバイエル教本を使い、授業終了時までにバイエル終了程度の力を持つことが単位認定の条件となっている。バイエルは106番まであるため、前期のうちに60番程度までは弾けるように自習することが求められてきた。ＭＬ教室は、年々増加するピアノ演奏が未経験の新入生へ対応するために設置された。従来は、リメディアル教育センターが入学前や前期の途中或いは夏休み中に、ピアノ初心者に対してピアノ初級講座を開いてきたが、数回の個人レッスンだけでは増え続ける初心者に対応することは難しくなってきたからである。初心者は楽譜をどう読むのかも、練習の仕方もわからず、自分が何とか弾いていることが正しいのかどうかもわからないまま練習していることが多い。いつも不安で苦手意識を克服することができないでいる。楽譜の知識を得て、正しく読譜できるように指導を受けながら、少しずつ弾いていくことが大切である。入学者の４分の１、約50名に上る数の学生が初心者である今日、複数名を対象に、実際に鍵盤を前に説明し、弾いて確認しながら楽典や理論を理解していくことができるＭＬ教室を設置し、入学者の不安に応えたいと考えた。それが準備講座開催の理由である。

子どもの歌の伴奏法に関しては、従来はグランドピアノが１台置いてある音楽教室で行われていた。楽譜や音楽のしくみに関する知識を机上で学んで、学生が授業外の時間に自分だけの力で知識を演奏に応用していくことは、わかりづらく効率も悪い作業であった。理解を確認する方法も一人ずつ弾いてもらうしか方法がなく時間もかかった。ＭＬ教室で実際に演奏しながら理論を確認できることで、理論の理解と演奏力の向上を達成できるのではないかと考え、15回の授業のうち11回をＭＬ教室で行った。

### １－２　問題の所在

保育者に求められる音楽の力とは、相対的に音程を正しくとって歌えることである。例えば保育において子どもを寝かしつけるとき歌う子守唄をピアノ伴奏付きで歌うことはない。声だけで歌う。手遊び歌やわらべ歌などの遊び歌を歌う時も同様で、ピアノなどの音高に頼らず、自身が音の高低の変化を認

知し、声に出せることが必要だ。そのためには歌う旋律の音程関係を正しく歌える力が必要になってくる。しかし、歌うことに関しては、カラオケで自分ひとりで歌ったり、或いは親しい仲間の前では歌ったりするけれども、不特定多数の人の前で歌うことには大変抵抗があり、自信をもって歌うことができないという学生が多い。自分が出す音が正しいかどうかわからないからである。手遊び歌を歌わせると、同じ旋律が繰り返される時、歌いだしの音が違ってしまう場面に遭遇する。歌の途中で音程がずれてしまうので、１番と２番とでは歌いだしの音が違ってしまうのだ。

日本はピアノが習い事のナンバーワンでなくなって久しいとしても鍵盤大国であることに変わりはない。保育園、幼稚園では３歳から鍵盤ハーモニカをやっている。だからといってピアノ等鍵盤楽器が得意な学生が多いわけでもない。そして楽譜が読めない。小・中学校や高校の音楽で楽譜を見て歌ったり楽器を演奏したりしてきたはずであるのに、楽譜を読むことができないのである。ピアノを習ったことがあると答える学生も楽譜はドレミはわかるがリズムはわからないという学生が大半である。ドレミはわかるといっても、どの音もすぐに何の音かわかるというのではなく、何の音かわかるところから数えていけばわかるというものなので、五線譜の音の下にカタカナでドレミをふらないとドレミで歌うこともできない。

子ども達と歌を楽しみ音楽活動を援助しなければならない職業を目指しながら、音楽は嫌いじゃない、むしろ好きだけれど大学のピアノは嫌い、人の前で弾くのも、弾き歌いするのも苦手と答える学生がクラスの８割を超える現実に問題を感じた。音程を正しくとりながら自信をもって歌うことができ、音楽の基礎的理論を理解して、保育者となるのに必要な演奏技術を身に着けることが必要である。

## ２．ピアノ準備講座における実践

ピアノ準備講座は、原則的に入学前にピアノを習ったことがない学生を対象に、週１回火曜日３，４時間目を使って、学生が自主的に集まる形で開催された。前期の間を通して多少の出入りはあったが、受講者の総数は39名であった。

### ２－１　初めに何をどのように行ったか

全く鍵盤を触ったことのない学生が対象であるので、まず鍵盤を眺める。気が付くことは何か。黒鍵が２つと３つ、交互に並んでいる。２つ並んでいる左側の黒鍵のすぐ左側の白鍵がドである。すべてのドを叩いてみる。それから中央のドに右手の親指をのせて、手のひらを丸く置いて右隣の白鍵一つ一つに１本ずつの指が乗るように置き、ドレミファソと歌いながら１音ずつ上行させて弾く。ソファミレドと下降する。左手でも同じことをする。初めから片手ずつだが左右の手どちらも動かす練習をし、指番号も歌いながら覚える。基礎練習としてドから始まってだんだん音を高くしていくような課題[1)]を弾く。

ピアノの鍵盤の位置や指の置き方、指番号に慣れてドからソまでの音の位置がわかったら楽譜を読むことに入る。基礎練習をまずドレミで読んで歌ってから弾く。基礎練習Ⅱ[2)]を使って基本的な音符の長さを覚える。いつも教員が拍を叩き、基礎練習曲では声に出して拍を数えながら弾く。

### ２－２　バイエル教則本[3)]の実践・読譜力の育成

バイエルは20番から始め、２分音符と付点２分音符の長さを確認する。まず教員が叩く拍に合わせながら、全員で右手の旋律をドレミで歌い、歌いながらリズムを叩く。次に歌いながら左手で拍を、右手でリズムを叩くということをしながら、音とリズムを理解する。それから皆で右手を弾く。次に左手も

同様に行う。ピアノ曲なので、曲が進んでくると曲中の音の音域が広く歌えないことが出てくるようになるが、最初のころの課題はドからソまでの音で、隣の音は隣の指で弾けば弾けるような課題が多く、十分に歌える。左手で弾く部分が低音でも、右手で弾く部分が高音でも、中央のド付近の高さでドレミで歌う。

30番台に入ると、すでに進度に差がついてくる。勘の良し悪しや練習の度合い、欠席による進度の差が出始めたらＭＬでの座席を１回１回見直し、進度が同じ者同士を近くに座らせ、いくつかのグループに分けてそれぞれの課題を一緒に練習する。時には一人で弾かせ、タッチを教えるためにアコースティックピアノで一人ずつ弾かせることを織り込みながら進める。46番から和音を分散する形の左手が出てくるが、その時には１音ずつ音を読むのではなく、和音としての塊でとらえるよう、和音ごとに譜面に色分けして音を囲んだりさせる。

このように練習を進めた結果、最後まで練習に参加していた学生24名のうち10名は60番を超え、14名は50番前後から58番位にまで到達した。とても離れている音や間違えやすい音にドレミを書き込むことはあるが、楽譜の音すべてに全面的にドレミを書き込む学生はいなかった。何より１番の目標であった読譜力を身に着け、自分で練習する力をつけることができた。

### ２－３　考察

このドレミで歌って、リズムを叩いてから弾くという練習の流れがとても重要で、集団でやることでこのような準備に時間を割くことができる。ドレミで歌う練習というのはソルフェージュのレッスンになるので、ピアノの個人指導の場ではなかなか行われないのが通常である。そのため、練習をするために楽譜にドレミをカタカナで書いてしまうのが一般的だ。しかし楽譜にドレミを振ってしまうといつまでたっても楽譜から音を読み取ることができず、カタカナだけを見て、音の高さを間違えても気づけないことが起きる。バイエルを終えても楽譜も読めなければリズムもわからず、調も拍子もわからないというのでは何の学びもなかったという結果になってしまう。

「音楽基礎Ⅱ」を履修した上級生からの聞き取りからは、初心者の学生がユーチューブなどを頼りに耳コピーで何となく練習し、リズムや音が間違っていれば直されるので、先生に言われた通りに直して合格をもらうというやり方の繰り返しだったため、いつまでも自分で音やリズムを判断できるようにはならなかったという実態がうかがえた。まず楽譜を読むこと、拍を取りながら歌うことが大切な入り口となることが確認された。

## ３．子どもの歌の伴奏法の授業での実践

### ３－１　授業における３つの学習目標

３年生対象の子どもの歌の伴奏法を内容とする授業では、本来バイエルを習う時に学習したい楽典や音楽の仕組みについて学び、伴奏法に結び付けていく。学習目標は以下に掲げる３点である。

①楽譜の仕組みを知り楽譜を読み解くことができる。自分が弾く曲を楽譜に書ける。

そのために〈音の高低とドレミがわかる。ドレミ唱法には２種類ある、すなわち固定ド唱法と移動ド唱法があることを理解し、用途によって使い分けられる。調がわかる。拍子とリズムがわかる。音の基本的なことがわかる〉ことが必要になってくる。

②コードネーム奏ができる。

現場ではピアノを使った様々な活動に対応するため、コードネーム譜として記譜されている譜面を

使うことがある。近年では教育実習においても、実習中弾くようにと示される課題曲がコードネーム譜であることがある。コードネームを理解し、コードネーム奏ができることが求められている。

③様々な和音が使われている子どもの歌の和声を理解できる。

とりわけ戦後の〈新しい子どもの歌〉と呼ばれる歌では、ピアノによる伴奏が歌の作品としての完成に占める割合が高くなり、様々なコードを駆使した難易度の高い伴奏がつけられるようになった。歌の内容や歌われる世界のイメージを彷彿とさせるような前奏があり、歌の途中にも歌の世界を歌詞とともに構築するような間奏が入り、歌の世界の余韻を残す後奏や、歌の終わりではなくピアノだけの後奏で初めて和声的な終始を迎えるために決してカットすることのできない後奏がついていたりする。それだけでなく、歌の途中にも２小節くらいの長さで、歌詞に引き続きイメージが膨らむようなピアノだけの部分が挿入されている。こういった歌の伴奏は難しいからといった理由で、数えきれないほどの数の簡易譜が編曲され出版されているが、前奏、間奏、後奏がカットされたり、使用されている和音が変えられたりして、必ずしも作曲者の意図を組みながら弾きやすさを追求した編曲とは言えないものもある。あまりにも野放図に編曲譜が出回っているので、原曲がどれなのか学生達には判断もつかないくらいである。学生達にはたとえ技術が足りなくて原曲を弾くことができなくても、和声上の魅力や作曲家の意図を汲み取る力をつけてもらいたい。理論として〈子どもの歌の和声がわかる、転調による和音の機能の読み替えができる、借用和音がわかる〉ことは、とりわけ戦後の新しい子どもの歌の魅力を理解するためには欠かせない力であると考える。

### ３－２　具体的な授業内容と工夫点

資料１に示されるのは、授業で行われる予定の具体的な内容と教科書[4]の該当ページを盛り込んだシラバスである。これにのっとり、15回の授業の中から特に教授法に工夫点が見られると考えられる内容について詳述する。

#### 第１回授業

楽譜が読め、書けることは目標だが、授業は楽譜に頼らない音楽理解から始める。まず「むすんでひらいて」を歌詞で歌う。日本語はモーラ言語で大体１モーラ１音で作曲されるが、１モーラを歌う際に高さが変わるところはどこかを問う。例えば〈むすんで〉の〈す〉のところである。黒板にひらがなで書かれた歌詞に、１モーラで高さの変わるモーラを○で囲み、どのように音の高さが変わるのか確認する。それからドレミを当てはめて歌う。学生たちの大半はドレミで歌ったことがない。50人弱のクラスで吹奏楽や合唱部など音楽の部活経験者の中に数名経験者がいるだけである。そのため音の階段であるドレミファソラシドを何度も歌う。右手を顔の前にかざして音の高さを示しながら歌って、高さの〈視覚化〉を図る。それから「むすんでひらいて」をミから歌い始めてみようと言って、「次は何の音になる？」と尋ねながら歌う。このドレミを歌詞の下に書き込む。（資料２参照「むすんでひらいて」プリント）

次に拍を叩きながら歌詞やドレミで歌う。教員が叩く拍に合わせて旋律のリズムを叩く。このリズムをスティック・ノーテーションで書く。（資料２プリント参照）この時音符について、名称と長さ、分割の関係を教える。スティック・ノーテーションはコダーイの「333のソルフェージュ」[5]などに示されるリズム譜だが、このように書くと歌のリズム形がよくわかり、フレーズのまとまりも見えてくる。プリントのように書き、この曲が何拍子になるのか考える。ここまでを書いたら歌いながら右手で弾く練習をする。

第２回授業

左手で弾く和音を考える。拍に合わせてすべてをドミソの和音で弾いて聞かせ、音がおかしいところはどこかを耳で判断させる。おかしいと感じるところの旋律の音に〇をする。それはラとレであることを確認し、別の和音の可能性を示唆する。右手旋律にラがあるときは左手和音もラが入っているドファラを弾く。右手旋律にレがあるときは左手和音もレの入ったシレソを弾くという程度の簡単な説明を行い、ドミソ、ドファラ、シレソを連続して弾く練習をする。拍に合わせて歌いながら何度も左手和音を弾く。ドミソはⅠの和音、ドファラはⅣ、シレソはⅤの和音、コードネームはC、F、Gと呼ばれるということだけ伝えてプリントに書かせる。

コードは簡単なスリーコード（Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ）、それも圧倒的に主和音であるⅠの和音（ドミソ）が曲を支えていることを聞いて、書いて、見て理解する。ピアノを弾きなれている学生には和音の形でなく、ドソミソ等和音を分散して弾かせる。この基本的な和音の分散形が使われている曲がバイエル教則本にはたくさんあるので、バイエルから例を引き、説明する。このように、ピアノの練習曲として考えられてきた課題と子どもの歌の伴奏法の課題の双方から説明することで理解と演奏技術の習得を進め、バイエルの練習を積んできたことが子どもの歌の伴奏法に生きてくることを実感させる。

第３回授業

七の和音を教える。なぜなら宿題として「ぶんぶんぶん」「ちょうちょ」をスティック・ノーテーションで書いてくるので、ファの解釈が問題になるからである。特に「ぶんぶんぶん」では、ソファミと降りてくる出だしのファを含む旋律を支える和音として、Ⅳの和音（ドファラ）を選んでくる学生がいるので、ソシレファの和音Ⅴ７の和音を教える。この段階で三和音と七の和音、音階上に並ぶ三和音をⅠⅡⅢⅣⅤⅥⅦの和音と番号付けし、これを和音記号と呼ぶことを教える。こうした理論の説明には教科書を使う。「ぶんぶんぶん」「ちょうちょ」ともにⅠとⅤの２和音で構成されていることから、このⅠ－Ⅴ－Ⅰという和音の動きが最も基本的なカデンツであること、Ⅴ７が特に属七の和音と呼ばれて多用される理由を伝える。ファについて理解し、メロディーと左手和音が一体となって響きを作り出していることを理解する。こうして「子ぎつね」に出てくる「ソファファファファ」の右手のファも正しく理解できるようになる。同じファでも「ソファファファ」のファ（Ⅴ７のファ）と「ファミミミ」のファ（Ⅰ度の和音の和音外音）は違うことも説明する。理論的には和声の様々なことを学ばなければ理解できず、簡単に理解することは難しい。それでも説明を加えながら耳で聞いて感覚的に理解することを目指す。自分で試し弾きしてみて、こんな感じに和音を付けたらいいかなという感触をつかめるようになることを目標としている。

第５回授業

ドレミを書いてくることが宿題だった「かたつむり」と「ゆき」で付点のリズムを学ぶ。「かたつむり」から始めるが、ここでも最初は歌詞で、次にドレミで歌う。この時「かたつむり」を４分の４拍子で、即ち「でんでん」１小節を４拍でとらえる。そうすると「でん」の「ん」の前に２拍目が打たれることになる。拍が叩かれるのを聞きながら歌いながら旋律のリズムを叩く。そのあと二人で向かい合って一人が拍、一人が歌のリズム叩きを交代で行った後、叩く動作が一緒にならなかったところはどこか問う。そこを隠れた拍として説明し、一人は隠れた拍だけを叩く。こうすると二人が同時に叩くことはなくなり、入れ違いで叩くことになる。これが付点のリズムであることを説明し、書き方を示す。（ス

ティック・ノーテーションで書く。）

その後、実際は４分の２拍子で書かれている譜面と、音符の音価の分割の一覧を見て、リズム（音価として３：１となるリズム）としては同じだが、音価が違うことにより拍との関係が変わること、付点４分音符と８分音符の組み合わせが作る２拍間の分割の付点リズムと、付点８分音符と16分音符の組み合わせが作る１拍の分割の付点リズムの記譜の違いとリズム感の違いを学ぶ。「ゆき」は初めから４分の２拍子で歌い、記譜する。

**第６回授業**

長音階のしくみを学び、鍵盤のどの音からもドレミファソラシドを始められること、ドに当たる音、長音階の始まりの音の音名が何調であるかを示すことを理解する。ここでは長音階を、半音階の中から長音階の音を選び出すという方法で学ぶ。つまり半音階上のある音を０番として、１オクターブ高い音まですべての鍵盤に番号をふると１オクターブ上の鍵盤の数字は12になる。この12の数字が何を表すか考えさせる。答えは半音の数。１オクターブは12個の半音でできている。そして０、２、４、５、７、９、11、12番の番号の音が、０番をふった音から始まる長音階の音である。この番号はＣ音を０番として鍵盤に番号をふった時、白鍵にふられる番号であるので、忘れてもすぐに書いて思い出すことができる。この方法を使う利点はある音を始まりの音として長音階ドレミファソラシドを作るとき、ハ長調以外は必ず黒鍵の音が入るが、それが何の音で、それは♯の音なのかｂの音なのか一目瞭然でわかるという点である。鍵盤にふられた長音階を作る数字に○をつけると黒鍵に○が付く。音階は下から１音ずつ音が階段を上るように高くなるものであるから、その順で書いていけば○の付いた黒鍵の音が♯の音かｂの音かわかるのである。この方法で♯、ｂ４つまでの長音階を書き、英語の音名と階名をふる。階名は音階の呼び名であり、すべてドレミファソラシドであることを徹底する。これはすなわち音階を構成する各音が次の音との間に持つ音程関係は決まっているが、絶対的な音高を示すものではないことを理解するために行う。

**第10回授業**

長調の音階として、♯、ｂ４つまでの調号を学ぶが、それぞれの音階の各音上にできる和音のコードネーム、和音記号を学ぶのは、ハ、ヘ、ト、ニの４つの長調に絞っている。子どもの歌はニ長調とヘ長調が多いことも理由の一つである。理解を助けるため、何調であるかはクラス名、和音記号は出席番号、コードネームは個人名と教える。つまりドとミとソでできている人はＣさんという名前だが、ハ長調クラスに所属しているときは出席番号は１番（Ⅰの和音）、だがクラス替えがあってト長調クラスに所属すると出席番号は４番（Ⅳの和音）という具合である。和音の構造の違いから和音の種類を学び、教科書のワークを使って音階音度上の和音を書いて、コードネームを判定する。この一覧を見ることでＣやＦ、Ｇ、Ｄといったメジャーコードや Am、Em、Dm、Bmといったマイナーコードがこれら４つの調の中に複数回登場するのを確認することができる。また、「僕のミックスジュース」のようにニ長調からト長調に転調する曲も、Ｄの和音がニ長調ではⅠ度だが、ト長調ではⅤ度の和音であることから、Ⅴ（D）→Ⅰ（G）とスムーズに移動できることを理解することができる。

第11回から第14回の授業

〈ハ、ヘ、ト、ニ長調による子どもの歌の伴奏和音をコードネームに従って書く〉、〈Ⅱ、Ⅲ、Ⅵ等マイナーコードや借用和音が使われている子どもの歌の伴奏和音〉を分析するなどの内容を扱い、特にこの２点の内容については、筆記試験を行った。

### ３－３　到達目標の達成度

目標の達成度は筆記試験と実技試験で測られた。

筆記試験では「子どもの歌１曲（今回は「うみ」）のコード譜が大譜表で示され、空欄となっているヘ音譜表にコードネームに従って和音を書く。」「同じ調による別の子どもの歌（今回は「ヤッホッホ夏休み」）が伴奏譜とともに示され、使用されているコードのコードネームと和音記号を判定する。」の大問２題が問われる。この問題を解くため、当該楽曲の調の判定、その調の音階音度上のコードの記載と各和音のコードネームの判定、その調のⅠ－Ⅳ－Ⅰ－Ⅴ－Ⅴ７－Ⅰのカデンツを書くことを基礎問題として課している。これにより目標の①と③の達成度を測る。

実技試験では２曲の子どもの歌（今回は「まつぼっくり」と「めだかの学校」）の伴奏部分の譜表が空欄２段になっている譜面を試験実施日の１か月前に配布し、記載されているコードネームに従って、３段譜の１番下の譜表に拍子に合わせて適切な音符で書く。（筆記試験の大問１と同じ内容となる。）この部分だけはあらかじめ解答を掲示する。この和音を自分なりにアレンジした伴奏譜面を真ん中の段に書き、試験当日２曲のうち当日指定された１曲を弾き歌いする。これにより目標の①と②の達成度を測る。アレンジが書かれた譜面は２曲とも提出。２曲とも記譜が正しく行われているか採点し、後日筆記試験の解答とともに返却する。

履修学生のうち欠席過多のため単位認定できない２名を除き、全員合格点に達した。授業への取り組み40％を含む総合評価で、100点換算中60％以上の取得が合格である。

### ３－４　授業に関するアンケートから振り返る

授業後、ＭＬ教室での授業内容がどのような学びにつながったのかを分析するため、履修学生84名のうち、78名にアンケートを行った。アンケートの内容は以下の通りである。

1．小学校、中学校、高校の音楽の授業、あるいはクラブ、あるいは別の音楽活動の中で、譜面をドレミ唱したことがありますか（ある・ない）。「ある」と答えた方はそれはいつのどういう時ですか。
2．ドレミ唱には２種類あること、つまり固定ド（音名）唱法と移動ド（階名）唱法があることを理解できましたか？（できた・できなかった）（なお、固定ド唱法と移動ド唱法について簡単な説明を付記した）
3．授業では新しい歌を歌う時「階名」で歌いましたが、階名で歌うことは音楽を理解する（あるいは歌いやすい）ことにつながりましたか？（つながった・つながらなかった）「音楽を理解することにつながった」と答えた方は、どういう点が音楽を理解する（あるいは歌いやすい）ことにつながったのですか？
4．リズムをスティック・ノーテーションで書いたことは音楽を理解する（あるいは歌いやすい）ことにつながりましたか？（つながった・つながらなかった）「音楽を理解することにつながった」と答えた方は、どういう点が音楽を理解する（あるいは歌いやすい）ことにつながったのですか？
5．この授業を受けて身についたことがあると思いますか？（ある・ない）「ある」と答えた方は、それはどんなことですか？

１、３、４、５については、あると答えた学生に対し自由記述を求めた。ただし、１の「ドレミ唱の経験の有無」については、授業内での進度や成績に有意な影響が見られなかったため、本稿では割愛する。その他のアンケートの結果については以下のとおりである。

まず、２の「唱法が２種類あることの理解」については、「できた」とした学生が73名、「できなかった」とした学生が３名、無回答が２名であった。

次に、３の「階名で歌うことによる音楽の理解」については、「つながった」とした学生が68名、「つながらなかった」とした学生が10名であった。「つながった」とした学生の記述には、以下のような解答が挙げられた。

| ３の自由記述の内容 | 人数 |
|---|---|
| 音程を意識して歌えるようになった | 21 |
| 歌いやすい、音が取りやすい、音が分かるようになった | 14 |
| 調を変えても音が取りやすい、調が違うことがわかりやすい、自分で移調する手助けになる | 7 |
| ピアノが弾きやすくなった | 11 |
| 歌を聞いて階名が浮かぶようになった | 2 |
| コードを考えやすくなった | 2 |
| その他 | 10 |
| 無回答 | 1 |

また、４の「スティック・ノーテーションで書くことによる音楽の理解」については、「つながった」とした学生が34名、「つながらなかった」とした学生が40名、回答なしが４名であった。半数を超える学生がスティック・ノーテーションは音楽の理解につながらなかったとしたが、アンケート実施後に「スティック・ノーテーションとは何か」と尋ねてきた学生が多く、活動を行ったのが授業の初めのころだけであったことや、この用語の説明がなく、用語がさす内容が浸透していなかったためにこのような結果になったとも考えられる。アンケートの問い方に不備があり、回答をそのまま参考にすることができないが、用語の意味を覚えていた学生からは「リズムがわかりやすい」「音の長さが正確にわかった」などの回答を得ることもできた。

最後の５の「授業を受けて身に付いたことの有無」については、78名全員が「ある」と答え、自由記述では以下のような回答が集まった。

| ５の自由記述の内容 | 人数 |
|---|---|
| コードや伴奏法、音楽のしくみの理解、自分でアレンジして弾けるようになった | 53 |
| 調の理解につながった | 11 |
| ピアノが弾けるようになった | 7 |
| 楽譜が読めるようになった | 4 |
| その他 | 3 |

５の自由記述の内容から、68％に当たる学生が「コードや伴奏法、音楽のしくみの理解、自分でアレンジして弾けるようになった」という内容の記述をしている、それ以外の記述も目標を部分的に達成したことに触れている点を考慮すると、授業の目標がおおむね達成されたことが伺える。

注目したいのは３の自由記述の中に「ピアノが弾きやすくなった」という回答が16％あることである。この点については次の考察の中で触れたい。

### 3－5　考察

前節のアンケートの3「階名で歌うことは音楽を理解する（あるいは歌いやすい）ことにつながりましたか？」に対する自由記述の回答の中に「ピアノが弾きやすくなった」とあるのは、授業内容の第1回や第2回の報告から読み取れるように、ドレミで歌い、歌った通りにピアノで弾くということを繰り返し行ったからであると推察される。準備講座のやり方と同じで、弾きやすさにつながる効果を持つ。しかし、本来音名としての役割を持つ固定ドで鍵盤の音を理解するピアノ奏法と、自在にドの音の実際的な音高を変えて歌う階名とは全く異なる役割を持つものなので、階名で歌うことはむしろピアノを弾くときには混乱を招くだけのことになるはずだ。この点に関し、初めのころの授業では、ドレミで歌うことを階名唱するとは言っておらず、第5回でハ長調ではない調の子どもの歌を弾くときに経験的に学び、ドレミに2種類の役割があることは第6回の長音階で階名を書くときに初めて説明される。敢えてこの問題に触れずに、歌ったドレミを実質的には固定ドとして捉えてピアノを弾くことを繰り返したことが、この回答につながったと考えられる。

移動ド唱法と固定ド唱法の問題は、日本の音楽教育で読譜教育が進まない大きな原因となっている、音楽の理解の根本にかかわる問題を秘めており、その点について補足する。

## 4．移動ド唱法と固定ド唱法の混乱

日本では音名としてハニホヘトイロを定め、ドレミファソラシは階名（移動ド唱法）であるとしながら、固定ド唱法でドレミの呼び名で楽譜を読んでしまったことがこの混乱を招いた原因と言えるだろう。それは学校で歌われる歌が、ピアノの伴奏で歌われるものとして教育の世界に入ってきたことに起因するのかもしれない。ピアノの楽譜もピアノという楽器もドの位置は決まっており、それは絶対音として示されるので固定ド唱法で音を読むことになる。本来絶対音つまり絶対的な音の高さを表すのは音名であるので、ピアノの鍵盤の音も「ハの位置はここ」と教えられるべきだったし、ピアノの楽譜はハニホで読まれるべきだった。しかしドレミの呼び名を音名として使う国もあることから、日本ではハニホヘトイロの音名があるにも関わらず、固定ドとしてドレミで音を読むようになり、固定ド（音名）唱法と移動ド（階名）唱法という2つのドレミ唱法が存在するようになった。

鍵盤楽器の指導だけを考えるなら固定ド唱法だけの理解で十分に指導することができる。しかし音楽のしくみは移動ド唱法に基づいて説明される。どんな調でもその調の音階を構成する音程関係は同じであるから、長音階はドレミファソラシドであると言えるし、それ故音階音度上にできる和音は、Ⅰ、Ⅳ、Ⅴの和音はメジャーコード、Ⅱ、Ⅲ、Ⅵの和音はマイナーコード、Ⅶはディミニッシュコードになる。Ⅰは何調であってもドミソでありⅣはファラドであるから、カデンツを構成するときの各声部の音の動きもドミソードファラ（Ⅰ－Ⅳ）と一つの表し方があるだけである。実際に弾かれる音は調によって変わるわけだが、構成は同じということを理解するのは移動ドの考え方に基づいていることになる。また、移動ド唱法すなわち階名で歌う利点は大きい。小学校の指導要領で、「移動ド唱法で歌うこと」と記載されているのは、移動ド唱法であればどの高さで歌うとしても「メリーさんの羊」は〈ミ　レドレミミミ～〉でよいからである。これが固定ド唱法になると、ハ長調なら〈ミ　レドレミミミ～〉だが、少し高くニ長調の高さで歌おうとすると〈ファ♯　ミレミファ♯ファ♯ファ♯～〉と歌うことになる。歌う時の呼び名が同じファでも、ニ長調の時はシャープの付いたファ、黒鍵の高さの音を出さなければならない。そのためには音楽を構成している音一つ一つの絶対的高さを確実に歌い分ける力が必要

になってくる。しかし移動ド唱法であれば、ドレミファソラシドの音程関係を覚えれば、高さが変わっても同じドレミ…の呼び名で歌うことができるのである。

保育者となる学生にとってまず身に着けたい音楽の力は、子どもの歌う高さに合わせてどの高さでも歌える力である。それ故伴奏楽器はピアノであるが移動ド唱法で歌うことの意味を説明する。ハ長調の曲は固定ドでいうドと移動ドでいうドが一致しているので問題ない。第３章３－２にある第５回の授業実践の報告はリズムに関することだけになっているが、この授業で歌う「かたつむり」はニ長調、「ゆき」はヘ長調である。しかし固定ドで歌わず、階名で読み、スティック・ノーテーションと階名で譜面を書き、ハ長調で和音をつけて弾いてから、長２度高く、完全４度高く弾くという手順を繰り返す。さらにさかのぼって「むすんでひらいて」のステック・ノーテーションのプリントにニ長調のコードネームを書き加えてニ長調で弾くことをする。（資料２参照）階名は音階の音の名前、ピアノの音は実音という呼び方をして混乱を避けるようにしている。

## ５．まとめ

今回行った授業実践の振り返りから、階名唱をすることで学生たちが相対的な音程を意識して歌うことができるようになったという結果を得た。自分が歌っているドレミが音名なのか階名なのかということを正確に理解し、用途によって使い分けるということは大変難しいことである。しかし、まず歌える高さでドレミで歌うこと（それはすなわち階名で歌うということである）が歌う力にもピアノを弾く力にもなり、読譜力の育成にもなるという証を得たので、今後も教材を精査し教授法をみがいて臨みたいと考える。また歌ったことをすぐに弾くことができ、音として確認し、演奏方法も確認できるＭＬ教室という環境に関しては、同じ学生が両方の授業形態を経験し比較することはできないが、授業を行っている立場からは、理解と定着率が高まったことを確信することができたことを報告する。

注

１）國學院大學幼児教育専門学校ピアノ指導担当編著　2004年初版発行　ピアノ曲集Ⅰ　保育者になるために　株式会社共同音楽出版社　p.8　基礎練習Ⅰ参照

２）同掲書　　p.11　基礎練習Ⅱ参照

３）全音楽譜出版社出版部編　標準バイエルピアノ教則本あるいは全訳バイエル教則本　株式会社全音楽譜出版社　を使用

４）二宮紀子　2014年　歌って、弾いて、書いてわかる子どもの歌・ピアノ伴奏のしくみ　音楽之友社

５）ハンガリーの作曲家で音楽教育家のコダーイ・ゾルターンは、音楽教育の基礎を読譜におき、アルファベットd,r,m,f,s,l,t（レター サイン）で階名を表し、五線記譜法の音符の棒や旗、点を使用してリズムを表すスティック・ノーテーションを使って読譜指導を行った。このコダーイの教授法は移動ド唱法とともにコダーイ・システムと呼ばれ、現在も世界各国の学校教育で採用されている。

資料１　　保育内容の指導法（音楽表現）シラバス：子どもの歌における旋律、リズム、和声の把握とコードネーム奏の方法

| 回数 | 日付 | ねらい | 具体的内容 | 教科書該当箇所 | 教室 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | ４月12日 | ・MLの使い方<br>・歌詞で歌える歌をドレミで歌うことができる。音の高低がわかる。<br>・拍に合わせて歌う。リズムがわかる。 | 「むすんでひらいて」 歌詞で歌う。ドレミで歌う。プリントにドレミを書く。拍を取りながら歌う。ドレミのリズムを打つ。リズムを書く。 | | 329 |
| 2 | ４月19日 | ・右手で弾きながら歌う<br>・ふさわしい和音を見つける。ドミソ、ドファラ、シレソのどれか。<br>・和音記号とハ長調のⅠ、Ⅳ、Ⅴのコードネーム | 「むすんでひらいて」の右手を歌いながら弾く。左手の和音を探す。和音を弾きながら歌う。圧倒的にドミソ（Ⅰ、C）、右手にレがあるときはシレソ（Ⅴ、G）、右手にラがあるときはドファラ（Ⅳ、F）<br>（宿題）「ぶんぶんぶん」「ちょうちょ」のドレミを書いてくる | プレレッスン１，２<br>L1、２、３、６ | 316ML |
| 3 | ４月26日 | ・七の和音（音程３度、７度の数え方）<br>・右手にファがあるときの左手和音は２種類：ドファラ（Ⅳ）かソシレファ（Ⅴ７）<br>・コードネーム譜を見る。どう弾けばよいか理解する | 「ぶんぶんぶん」「ちょうちょ」を歌詞、ドレミで歌う。リズム、和音記号、コードネームを書く。両手で弾きながら歌う。<br>（宿題）「むすんで」の左手和音を楽譜に書く。「手をたたきましょう」「大きな栗の木の下で」を弾いてくる | プレレッスン３<br>L1、２、３ | 316ML |
| 4 | ５月10日 | ・「ぶんぶんぶん」を使って伴奏のアレンジの仕方を学ぶ<br>・Ⅴ７の和音を理解する（L4）<br>・伴奏形の工夫（１）51ページ「手をたたきましょう」や「大きな栗の木の下で」の伴奏をアレンジする | 「ぶんぶんぶん」をアレンジした伴奏を弾きながら歌う。「手をたたきましょう」「大きな栗の木の下で」を弾きながら歌う。Ⅴの和音をⅤ７にして弾く。　（宿題）「かたつむり」「ゆき」のドレミを書いてくる | L4 | 316ML |
| 5 | ５月17日 | ・付点のリズムを理解する（プレレッスン３、14ページ）<br>・音程を理解する（L7）<br>・伴奏形の工夫（２）53ページ「お帰りの歌」に間られる伴奏形の工夫を理解する | 「かたつむり」「ゆき」のリズムを書く。歌いながら弾く。「お弁当の歌」「お帰りの歌」のリズムと和音を理解して弾く<br>（宿題）「お弁当の歌」「お帰りの歌」を練習する | プレレッスン３<br>L7 | 316ML |
| 6 | ５月24日 | ・長音階を理解する | 一人ひとり「お弁当の歌」「お帰りの歌」を歌いながら弾く | L8 | 329 |
| 7 | ５月31日 | ・長音階を理解する | 一人ひとり「お弁当の歌」「お帰りの歌」を歌いながら弾く | L9 | 329 |
| 8 | ６月７日 | ・調号を理解する。<br>・ハ長調、ヘ長調、ト長調、ニ長調のカデンツ（Ⅰ－Ⅳ－Ⅰ－Ⅴ－Ⅴ７－Ⅰ）を弾く。 | 「メリーさんの羊」を４つの調で弾く。「おかたづけ」ヘ長調、「みつばちマーチ」ト長調を弾く。 | L10、11、12、13 | 316ML |
| 9 | ６月14日 | ・２種類のⅤ７を使い分ける<br>・伴奏をアレンジ（伴奏形を工夫）する（59ページ、63ページ） | 「幸せなら手をたたこう」ヘ長調、「せんせいとお友だち」ハ長調の左手和音を考えて弾く | L14、15 | 316ML |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 10 | 6 月21日 | ・和音の種類 4 種類とコードネーム、特にメジャーコードとマイナーコードを理解する<br>・セブンスコードを理解する（特にＶ７）<br>・音階音度上のコードとは何を指すのか、決まっていることを理解する | 「きのこ」を和音分析する | L17、18、19、20 | 316ML |
| 11 | 6 月28日 | ・借用和音を理解する<br>・マイナーコードを含む基本的和音がわかる（正しく五線紙に書ける） | 「ドキドキドンー年生」を和音分析する<br>「松ぼっくり」「めだかの学校」（実技試験課題）の基本和音を書く（宿題）「松ぼっくり」「めだかの学校」を基本和音にそって伴奏形をアレンジする | L22、23 | 316ML |
| 12 | 7 月 5 日 | ・曲の途中で転調する曲の和音の理解 | 「ぼくのミックスジュース」を和音分析する | L24 | 316ML |
| 13 | 7 月12日 | まとめ<br>・コードネーム奏はどうすればよいか。<br>・子どもの歌に使われている様々なコードを理解する<br>・筆記試験と実技試験の説明 | 練習問題を解く。（宿題）よく復習し筆記試験の準備をする。実技試験のアレンジをする。実技試験課題を弾き歌いする練習をする。 | 上記すべて | 329 |
| 14 | 7 月19日 | 筆記試験 | （宿題）実技試験の準備をする。弾き歌いの練習。 | 上記すべて | 316ML |
| 15 | 7 月26日 | 実技試験 | ２曲のうち１曲を当日指定。自分のアレンジで弾き歌いする。 | | 329 |

資料２

**保育内容の指導法（音楽表現）**

「むすんでひらいて」をドレミで歌って歌詞の下にドレミを書き、リズムを書きましょう。

メロディーのドレミから判断して和音を選び、和音記号（Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ）を書きましょう。

「むすんでひらいて」をハ長調で弾く時、選んだ和音記号のコードネームは何になりますか？

「むすんでひらいて」をニ長調で弾く時、選んだ和音記号のコードネームは何になりますか？

4/4

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | む | す | ん | で | ひ | ら | い | て | 手 | を | うっ | て | む | すん | で | ～ |
| ドレミ | ミ | ミレ | ド | ド | レ | レ | ミレ | ド | ソ | ソファ | ミ | ミ | レド | レミ | ド | ～ |
| リズム | ♩ | ♫ | ♩ | ♩ | ♩ | ♩ | ♫ | ♩ | ♩ | ♫ | ♩ | ♩ | ♫ | ♫ | ♩ | ～ |
| 和音（記号） | Ⅰ | | | | Ⅴ | | Ⅰ | | Ⅰ | | | | Ⅴ | | Ⅰ | |
| コードネーム（C） | C | | | | G | | C | | C | | | | G | | C | |
| コードネーム（D） | D | | | | A | | D | | D | | | | A | | D | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | ま | たひ | らい | て | 手 | を | うっ | て | そ | の | 手 | を | う | え | に | ～ |
| ドレミ | ミ | ミファ | ソ | ソ | ラ | ラ | ソファ | ミ | ミ | ミファ | ソ | ソ | ラ | ラ | ソ | ～ |
| リズム | ♩ | ♫ | ♩ | ♩ | ♩ | ♩ | ♫ | ♩ | ♩ | ♫ | ♩ | ♩ | ♩ | ♩ | ♩ | ～ |
| 和音（記号） | Ⅰ | | | | Ⅳ | | Ⅰ | | Ⅰ | | | | Ⅳ | | Ⅰ | |
| コードネーム（C） | C | | | | F | | C | | C | | | | F | | C | |
| コードネーム（D） | D | | | | G | | D | | D | | | | G | | D | |

D.C